

弓削神社は、市川大門字二之宮にあり、五柱の神々が祀られている。瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）、木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）、彦火々出見尊（ヒコホホデミノミコト・別名山幸彦）、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）、大伴武日命（オオトモタケヒノミコト）です。

弓削神社の創立の経緯は、四世紀前半の大王とされる第十二代景行天皇より、東国平定を命じられた皇子日本武尊は帰途甲斐酒折宮で「新張を過ぎて幾夜か寝つる・」の歌を詠み、蓮歌の癸祥となりました。この時、副将軍大伴武日に靱負（ユゲイ）の称号を与えた。

大伴武日はその後市川にとどまり、居館を造営して、周辺一帯を治め、その地の住民はその徳をしたい、その子孫と共に当社を創設しました。その創設の年代は、第十三代成務天皇、第十四代仲哀天皇の御代であろうとされる。仮にその年を西暦三百五十年とすると、創立は千六百七十年以前のこととなります。

また、延長五（927）年に編纂された延喜式神名帖には甲斐二十社のうちの一社として載っており。明治6年には郷社に指定されている。

町のホームページのように弓削神社の創建された年代ははっきりしていないが、承和七(840)年に完成した歴史書・日本後紀に「延歴二四(805)年十二月甲斐国巨摩郡弓削神社官社に列す靈驗あるを以てなり」とあり、この辺りが当時巨摩郡とされていたらしく、少なくとも千二百年以前の創立とされている。

当社の南、小字御弓削の葡萄畑の中に弓削塚と云うのがあり、大伴武日命の墳墓とされている。

神社の名前の弓削(ユゲ)は鞞負部(ユゲイベ)の転訛したもので、「鞞負」は矢を入れる鞞を負うものであり、鞞を持って朝廷の警護の任に当たる武官を指す。弓削神社の神

紋が弓（抱き弓）を二張向き合わせた紋様になっ
ているのもこうした経緯によるものであ
ろう。

鳥居、隨身門、拝殿、本殿の建物群は平成
二六年に市川三郷町の有形文化財に指定され
た。

境内の面積は六千 m^2 （二千坪）で、その大
部分はシラカシの自然林であり、特に社殿の
後方では純林を形成し、総数六〇本余、樹高
二五 m に達し、県下まれに見る林叢は古代の
暖帯林の残されたもので、貴重なものだが、
近年植植された檜によって、シラカシの幼木
が育たず、将来檜の植栽林に変化すると言わ
れている。

弓削神社に係るエピソードをいくつか紹介

すると、

甲斐源氏の祖刑部三郎義清は甲斐青島郷の
下司として市川に館を構えた時、当社に昼夜
こもって（参籠して）左の歌を詠んだ。

「おのずから 心も清し みしめ縄 弓削
の社の 神垣のうち」

源義光の三男逸見冠者刑部三郎（49歳）、

甲斐青島郷の下司として甲斐の目代とな
る。（永保二年1082～久安元年1145 六四

歳没）

徳川家康が天正十年（1582）七月、甲斐に
入国し市川平塩に陣を敷いた時、ちようど例
大祭の日で、例年の通り盛大に神輿の渡御を
始めたところ、時ならぬ嵐に会って見物人も、
担ぎ手までも逃げ去る中、神主がひとり平然

と立ち尽くしていると、家康公は同情して甲冑に身を固めた兵士たちに担がせ祭りを齋行させたという。また、鳥居の前に老松があり、その形はあたかも蟠龍（うづくまる龍）のようになり、幾百年を経た風格があり、感心し褒め讃えたので、「お言葉の松」と称され、神社のご神木とされたが、江戸時代末期には枯れはてて跡形もなくなつた。家康公は、東照宮として境内社として祀られている。

大伴の武日尊の子孫は代々青嶋を名乗り、弓削神社の神主を務め、第二十七代能登守青嶋貞賢（サダカタ）は国学・書・俳諧・和歌に秀で、特に書では仮名書きで笹乃屋流と称し、名人と言われた。門人も多く、国内外の国学者・歌人と交流があり、句会も多く催さ

れた。

拝殿内には、天保九年から明治十二年までの奉納された俳句や和歌の板額が五面掛けられている。

境内・神主屋敷に建てられた歌碑を挙げてみると、

「お久里行く月日はう連しけふことに 津
つかな那きみ能忙しくして」

大教正 二十七代青島貞賢 (弓削神

社神主)

「ひろくはうやぶかりそぎてかしの杜 梅
の林となりにけるかな」

「咲くに咲くこの花ぞのの梅のかや あま
りとかすむ平塩の丘」

「植えわたす老樹わか木もおしなべて い

くらの春にあわんどどす」

文久元年 後藤鑑次郎清平 市川陣屋

公事方

「すずしきや弓削の社の注連そよぐ」

六十五翁 渡井松哉 明治四一年 市

川大門六丁目

弓削神社を訪れた歌人の弓削神社を詠った

詩歌、五首を挙げると、

おのづから心もすゞしみしめ縄 弓削の社の

神垣のうち

義清朝臣①、②、⑥

甲斐源氏の祖・刑部三郎義清、甲斐青島の

郷の下司として市川平塩に館を構え、当

社に昼夜籠つて詠んだ。

鳴りはづの 音をとどめし 大伴の ゆきべ
の宮は 世に聞えけり

万延元（1860）年、松廻舎 松垣内 飯

塚久敏 ①、②

上野（群馬県）、国学者神官、歌人、甲斐

駿河など諸国遍歴（文化七年1810）元治 9

元年1865五六歳）弓削神社にも逗留。玉

籠集の選者。

大伴の 名におふ 鞞負 あともひて 東の夷
を 掃清めつゝ

奥河内清香 ①、

② 本名今尾逸平、

下野（群馬県）の人。国学者。橘守部に師事（青島貞賢と同門）。

足利で私塾を開く。文化二年（1805）～明治六年（1873）六九歳）玉籠集に和歌所載。

うぶすなの みまえはいとど 神さびて
松にとりるに つもるしら雪 篠乃屋

柳坪 青嶋貞賢

10

⑤

第二十七代弓削神社神官。橘守部の門人。和漢の史籍に通じ、詩歌俳諧に秀で、書道では仮名の文字で笹乃屋流を創始。信州高島藩、伊那県方、山梨県方に奉職、（文政元年（1818）～明治29年（1896）七八歳）

春風に 柳の坪も かおるなり 梅のはやし
や まちかかるとむ

桃廻家

渡邊壽

(青洲の舅)

⑥

紙問屋叶屋主人、通称権右衛門、号・桃廻家。狂歌師匠・国学者黒川春村の門人。

(嘉永3年(1850年)江戸より市川に招聘、叶屋に一月逗留、纪行文並山日記を著す)

恐慌救済・社会事業に尽くし、日新館を開塾、市川小学校の前身となる。

(享和3年1803～明治8年1875七二歳)

参考資料

① 「甲斐叢記 卷四」 大森快庵 嘉永年中 弓削神社の項

- ② 「飯塚久敏と良寛」 高木明 平成七年刊
- ③ 「甲斐名勝志 卷之三」 天明年中 萩原元克 弓削神社の項
- ④ 「甲斐から駿河へ」 村松志孝編纂 昭和十年発行
- ⑤ 「歌集雪もゝ歌」 青嶋貞賢著 青島貞夫発行 平成元年サンニチ印刷
- ⑥ 「市川大門町誌」 昭和四十二年発行 文学和歌の項七六二頁、四〇九頁